

# わが国工作機械産業の需給実績と見通し

〔2026年1月9日発表・暦年ベース〕

ニュースダイジェスト社「月刊生産財マーケティング」編集部

## 1. 受 注

●昨2025年の受注総額は前年比6.4%増の1兆5800億円となった。24年夏を底に、外需主導による回復基調が強まり、特に昨年後半は高水準で推移した。だが、内需は主力の自動車産業でパワートレインの方向性が固まり切らなかったことなどから設備投資需要が伸び悩み、全体的に厳しい環境となった。外需は米国トランプ政権の関税政策の影響が当初懸念されたものの、アジアや米国などが堅調で、3年ぶりに1兆1000億円台を突破したようだ。ただし、円安効果の影響が大きいことには注意が必要で、どの市場や業種を得意としているかにより、工作機械メーカー各社が抱く景況感や受注額には大きな乖離が見られる。

●26年の受注総額は同7.6%増の1兆7000億円と見通す。前年に引き続き、外需主導で受注が回復へと進むだろう。世界経済の減速感やトランプ政権の関税政策の影響、地政学的リスク、為替レートの動向には警戒が必要だが、航空宇宙や防衛、エネルギー、造船産業などの好調業種からの活発な需要は26年以降も継続すると予想される。また、半導体関連産業の回復がより鮮明になる他、低迷が続いた自動車産業でもエンジン関連の設備投資がいよいよ動き出すとみられる。この他、日本では高市政権が設備投資喚起策を打ち出すなど、26年は内外需ともに好要因が多く、市場環境が上向くと期待される。

## 2. 生 産

●昨2025年の生産額は前年比6.5%増の9600億円となった。外需を中心とした受注環境の回復と合わせ、生産額も生産台数も増加基調となった。門形マシニングセンタ(MC)などの大型機の需要が航空宇宙やエネルギー産業向けに堅調で、生産額の増加につながった。また、インドや東南アジアなどにおいては電子機器関連向けの小型MCの需要が活発で、台数ベースで大きくけん引した。

●26年の生産額は同4.2%増の1兆円と見通す。受注が底堅く推移するため、生産額も生産台数も緩やかに回復するだろう。前年に続いて門形MCなどの大型機が生産額、小型MCが生産台数をけん引すると予想される。また、自動車産業の設備投資需要が復調すれば、これまで低迷だったNC旋盤などの生産も活発化すると期待される。

●近年、工作機械に搬送装置、検査機器、ソフトウェアなどを組み合わせた自動化システムの需要が高まり、1台当たりの単価が上昇している。しかし、工作機械メーカーにとっては売上高に占める購入品の比率が高まるため、手離れが悪くなるわりに利益率が低下しやすくなるなどの問題もある。

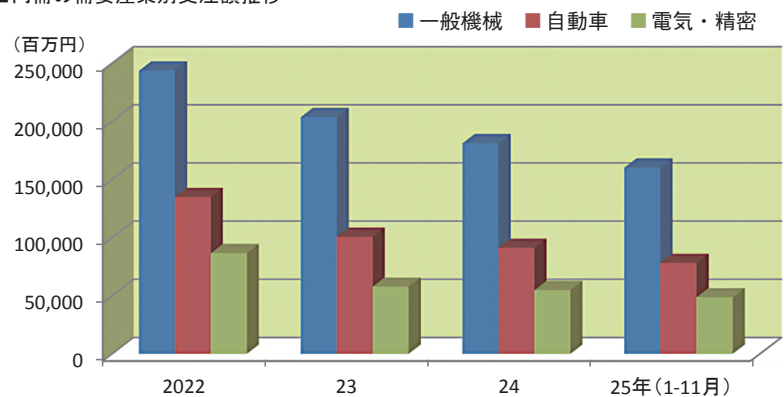
〔日本工作機械工業会統計〕

(単位:百万円、カッコ内は前年比増減率%)

◆暦年	2022年	2023年	2024年
受注総額	1,759,601 (+14.2)	1,486,519 (-15.5)	1,485,109 (-0.1)
内 需	603,231 (+18.2)	476,821 (-21.0)	441,538 (-7.4)
外 需	1,156,370 (+12.1)	1,009,698 (-12.7)	1,043,571 (+3.4)

◆暦年	2025年	2026年予想
受注総額	1,580,000 (+6.4)	1,700,000 (+7.6)
内 需	440,000 (-0.3)	500,000 (+13.6)
外 需	1,140,000 (+9.2)	1,200,000 (+5.3)

■内需の需要産業別受注額推移



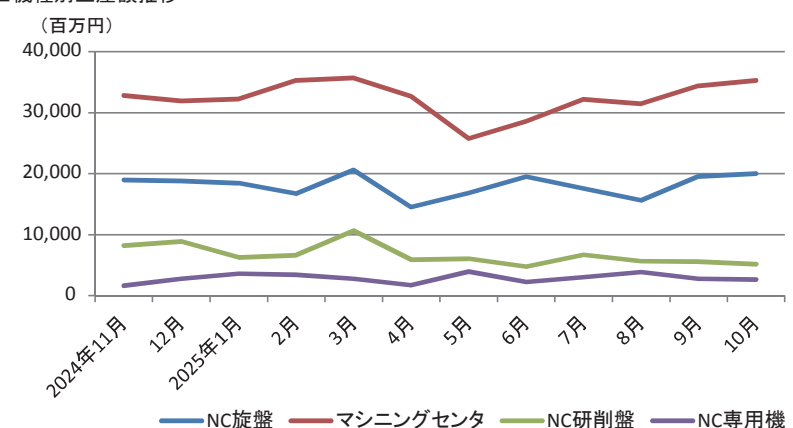
〔経済産業省機械統計〕

(単位:百万円・台、カッコ内は前年比増減率%)

◆暦年	2022年	2023年	2024年
金 額	1,078,833 (+20.5)	1,051,791 (-2.5)	901,336 (-14.3)
台 数	70,004 (+3.6)	58,832 (-16.0)	50,449 (-14.2)
・単価	15.4 (+16.7)	17.9 (+16.2)	17.9 (-0.0)

◆暦年	2025年	2026年予想
金 額	960,000 (+6.5)	1,000,000 (+4.2)
台 数	54,000 (+7.0)	58,000 (+7.4)
・単価	17.8 (-0.6)	17.2 (-3.4)

■機種別生産額推移



### 3. 輸 出

●昨2025年の輸出額は前年比9.0%増の8300億円となったもよう。円安が追い風となり、海外市場を得意とする日系工作機械メーカーの受注環境は底堅かった。しかし、ドルベースで外需を見ると月平均にして6億3000万ドル程度で推移しており、必ずしも好況とはいえない水準にある。米トランプ政権の関税政策が輸出環境に一時的に影響を及ぼしたものの、中国をはじめとした東アジア向けは増加した。米国も航空宇宙産業などの一部の好調業種がけん引し、比較的堅調であった。一方、欧州はドイツの景気減速が尾を引き、全体的に弱含みとなった。

●26年の輸出額は同10.8%増の9200億円と見通す。26年の世界経済の成長率は前年を下回る見通しだが、円安傾向が継続するとみられるため日系工作機械メーカーにとっては有利な状況が続く。また、トランプ政権の関税政策が着地すれば、一時的に様子見されていた設備投資の案件が各市場で再び動き出すとの期待もある。中国は一定規模の底堅い需要が見込めるものの、政策に伴う設備投資の冷え込みが懸念される。米国は製造業の国内回帰が進む他、航空宇宙や防衛、エネルギー産業などからの活発な需要が持続しそうだ。欧州も航空宇宙産業を筆頭に回復傾向で推移するとみられる。

〔財務省貿易統計〕

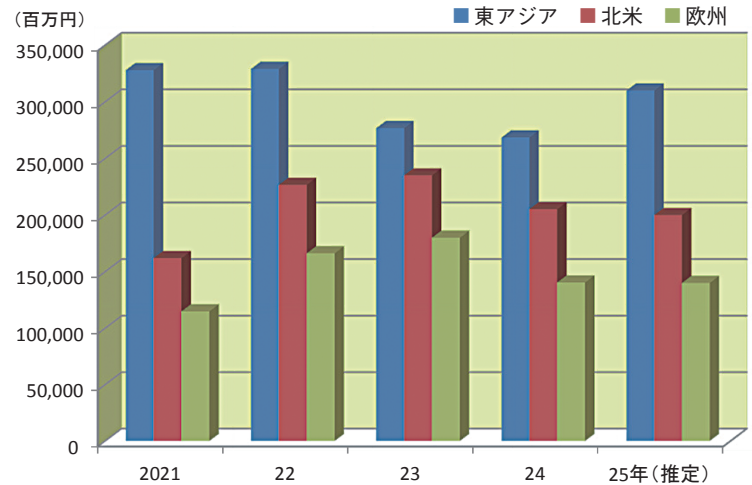
(単位: 百万円、カッコ内は前年比増減率%)

◆暦年	2022年	2023年	2024年
総金額	857,072 (+20.3)	830,389 (-3.1)	761,738 (-8.3)
・対東アジア	329,068 (+0.3)	276,800 (-15.9)	268,471 (-3.0)
・対北米	226,672 (+39.9)	235,084 (+3.7)	205,220 (-12.7)
・対欧州	166,226 (+44.6)	179,972 (+8.3)	140,461 (-22.0)

◆暦年	2025年	2026年予想
総金額	830,000 (+9.0)	920,000 (+10.8)
・対東アジア	310,000 (+15.5)	340,000 (+9.7)
・対北米	200,000 (-2.5)	250,000 (+25.0)
・対欧州	140,000 (-0.3)	160,000 (+14.3)

■主な市場別輸出額の推移



### 4. 輸 入

●昨2025年の輸入額は前年比11.2%減の700億円となったもよう。国内市場が厳しい状況であったのに加え、円安で輸入機の価格競争力が相対的に低下したため、2年連続のマイナスとなった。

●輸入機市場の主力機種は旋盤やレーザ加工機、研削盤、マシニングセンタ(MC)など。主力機種はMCを除き、軒並み振るわなかった。為替の影響や自動車産業の不振が重なり、特に旋盤の輸入額が大きく落ち込んだ。

●26年の輸入額は同7.1%増の750億円と見通す。国内市場は回復に向かうものの、円安傾向は今後も継続するとみられるため、輸入機市場にとっては26年以降も不利な状況が続くだろう。内需の回復に伴って旋盤や研削盤などは前年を上回ると考えられる。

〔財務省貿易統計〕

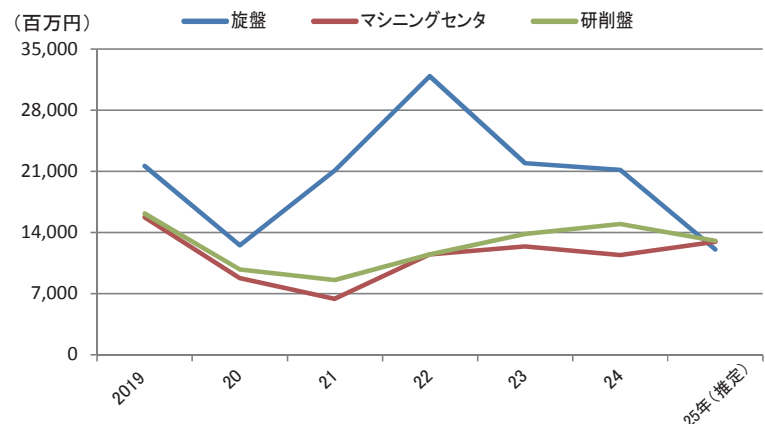
(単位: 百万円、カッコ内は前年比増減率%)

◆暦年	2022年	2023年	2024年
総金額	87,282 (+20.1)	88,258 (+1.1)	78,793 (-10.7)
・旋盤	31,900 (+51.0)	21,964 (-31.1)	21,186 (-3.5)
・MC	11,508 (+79.4)	12,431 (+8.0)	11,416 (-8.2)
・研削盤	11,510 (+34.4)	13,835 (+20.2)	14,990 (+8.3)

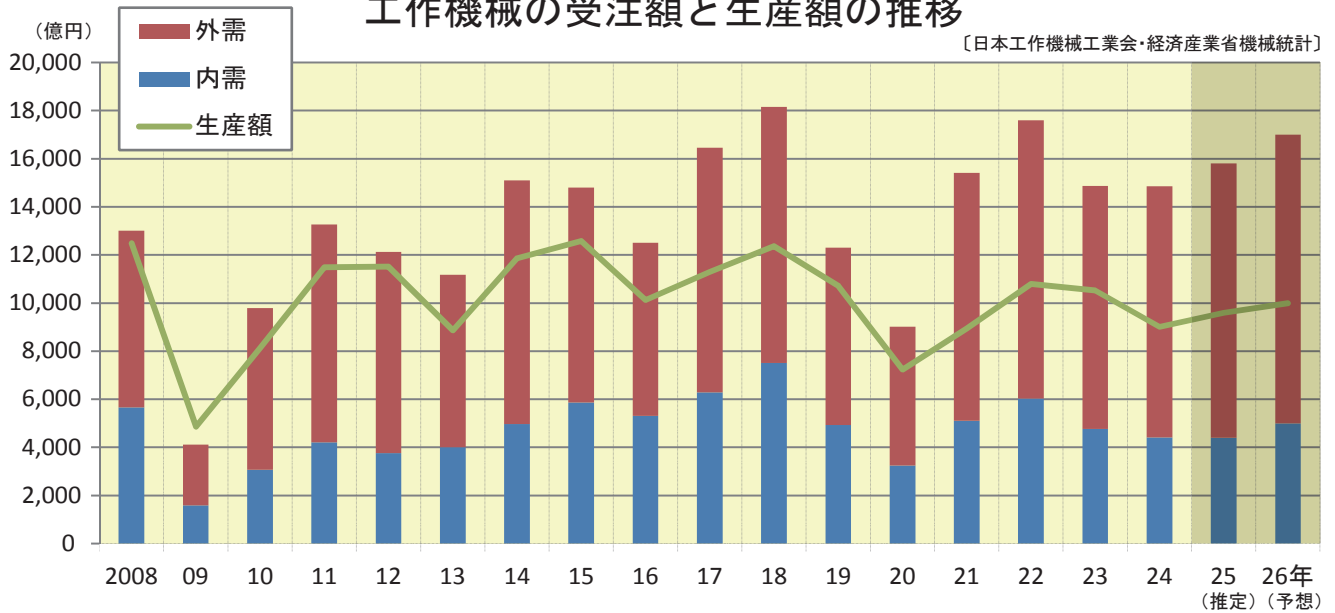
◆暦年	2025年	2026年予想
総金額	70,000 (-11.2)	75,000 (+7.1)
・旋盤	12,000 (-43.4)	13,000 (+8.3)
・MC	13,000 (+13.9)	13,000 (+0.0)
・研削盤	13,000 (-13.3)	14,000 (+7.7)

■機種別輸入額推移



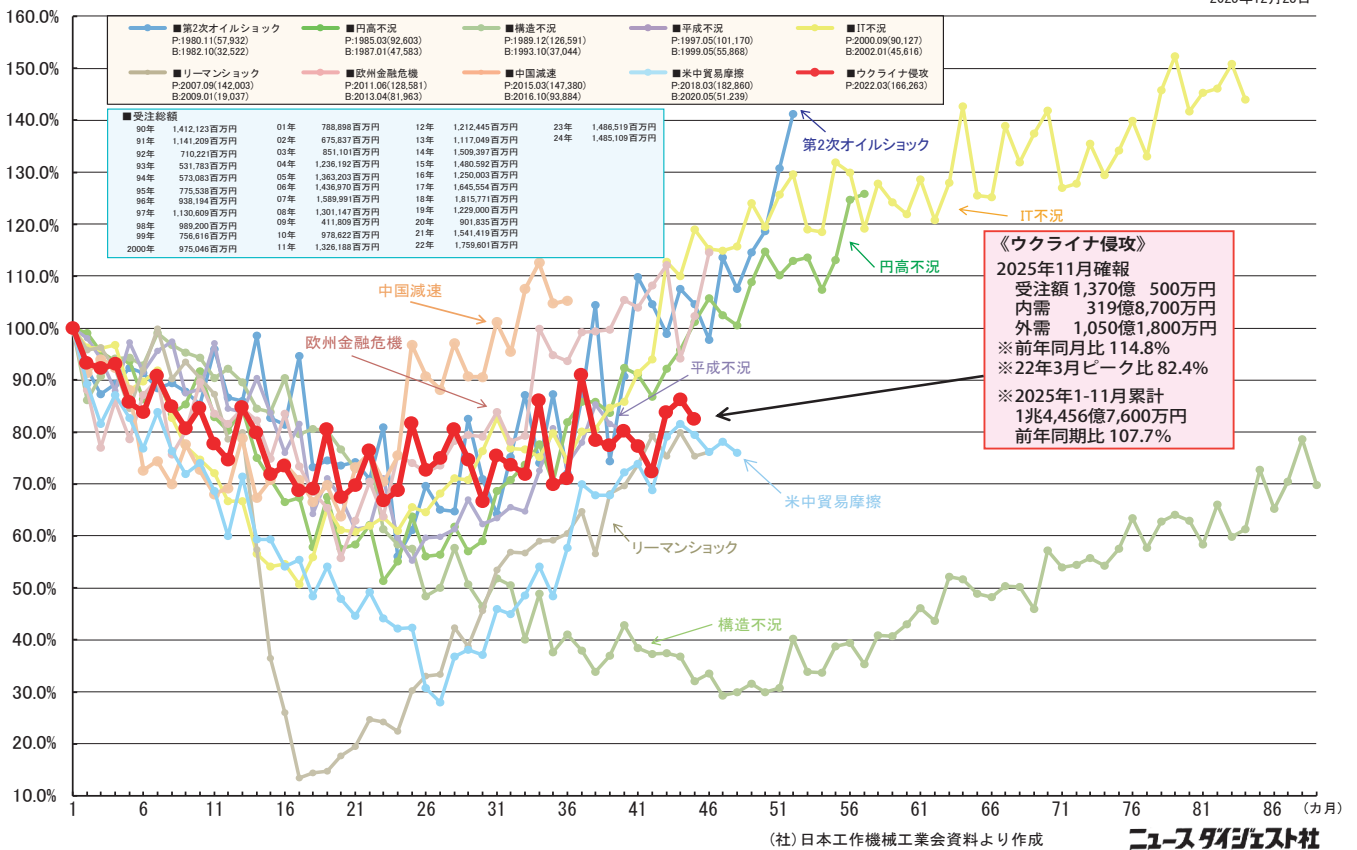
## 工作機械の受注額と生産額の推移

〔日本工作機械工業会・経済産業省機械統計〕



## 工作機械「内外需」受注グラフ 2025年11月(確報)

2025年12月23日

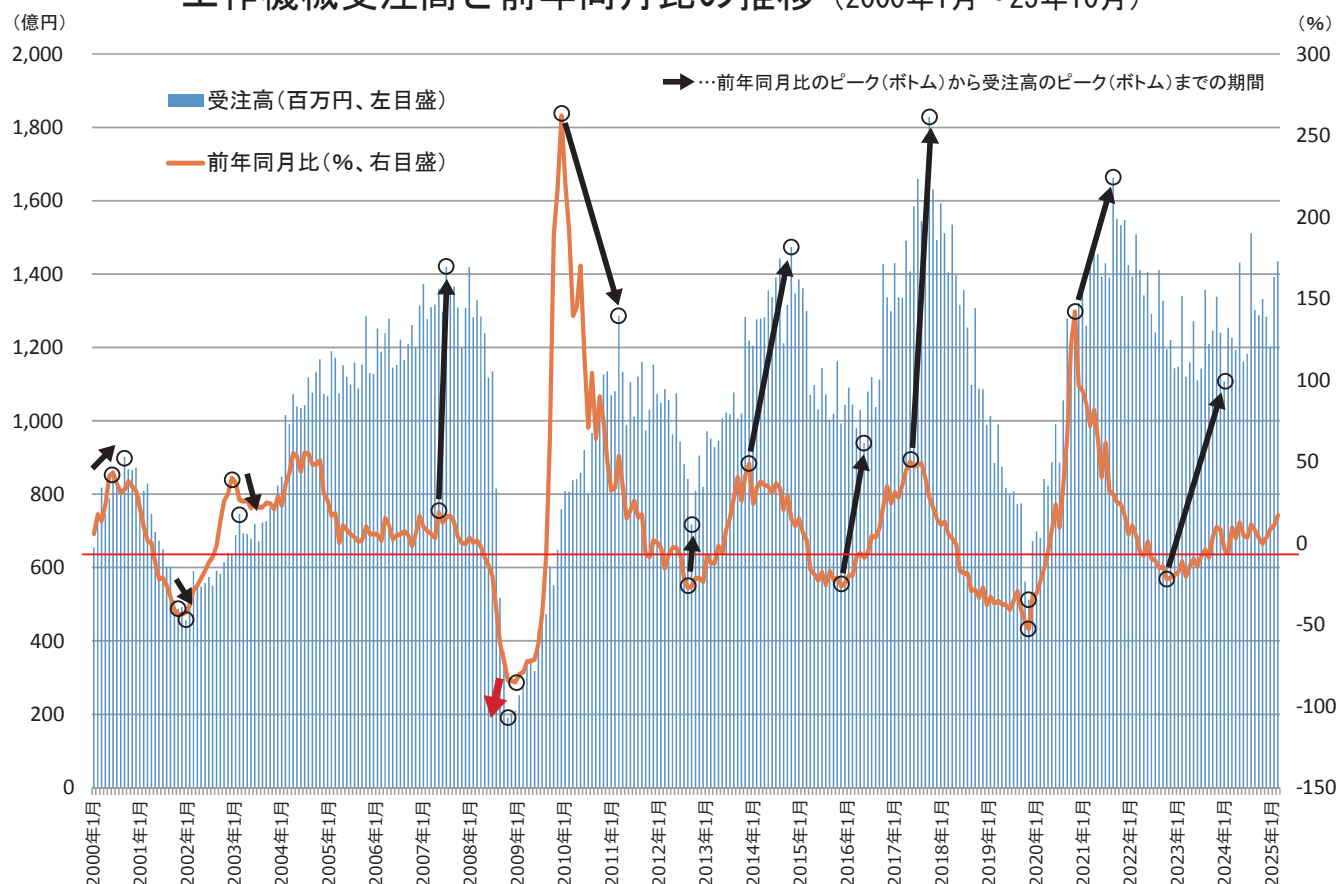


ニュースダイジェスト社

●グラフ(下)の見方: 景気の頂点にあたる四半期の受注額を100の指数で表し、その後の景気後退と回復(谷と山)の期間と高低を示した

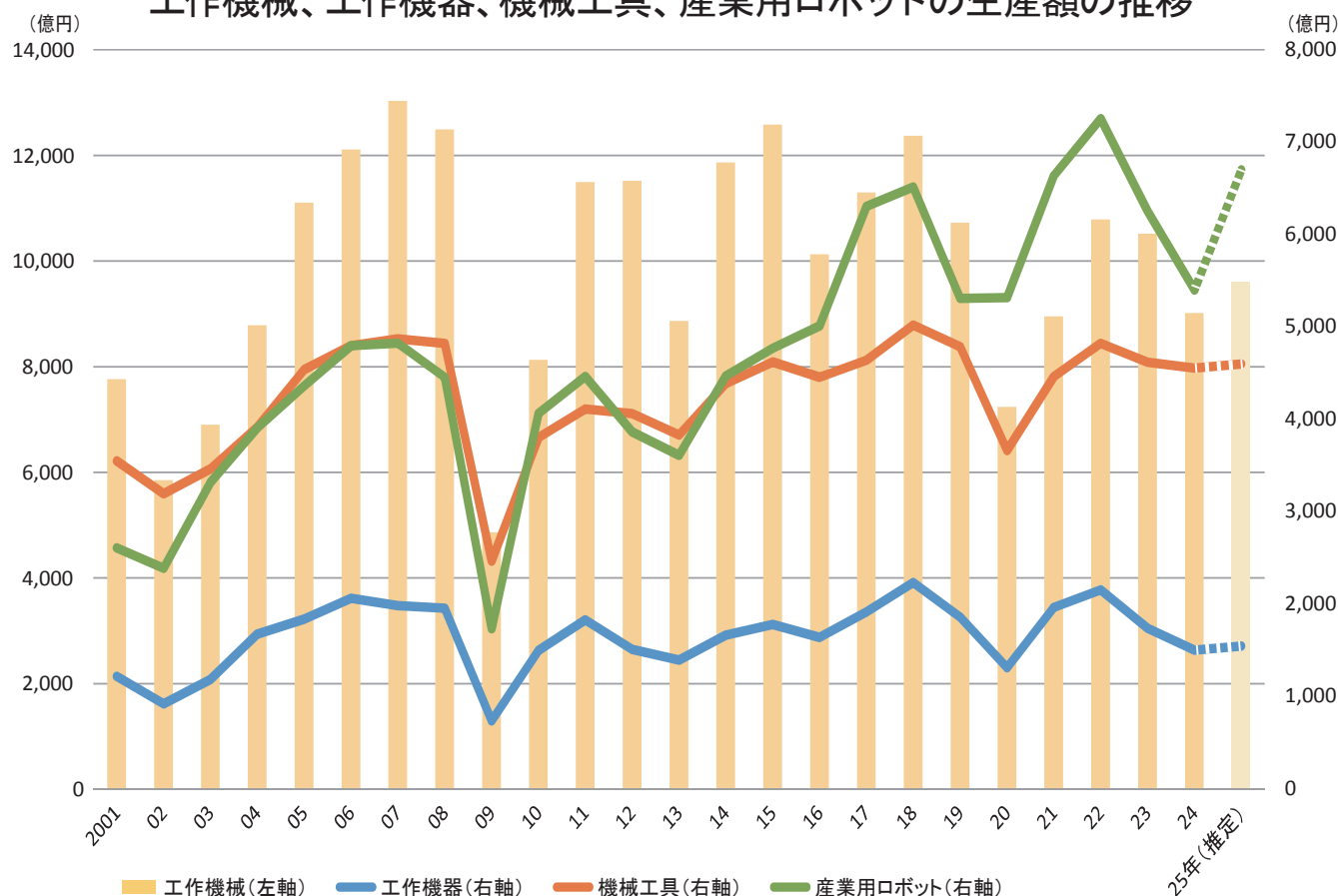
【グラフ説明】	頂点P	底点B	底点/頂点	P⇒B期間	B⇒次P期間
①第2次オイルショック不況	80年11月 (57,932)	82年10月 (32,522)	56.1%	24ヵ月間	18ヵ月間
②円高不況	85年03月 (92,603)	87年01月 (47,583)	51.4%	21ヵ月間	22ヵ月間
③構造不況	89年12月 (126,591)	93年10月 (37,044)	29.3%	42ヵ月間	43ヵ月間
④平成不況	97年05月 (101,170)	99年05月 (55,868)	52.2%	23ヵ月間	16ヵ月間
⑤IT不況	00年09月 (90,127)	02年01月 (45,616)	50.6%	14ヵ月間	55ヵ月間
⑥リーマンショック	07年09月 (142,003)	09年01月 (19,037)	13.4%	16ヵ月間	29ヵ月間
⑦欧州金融危機	11年06月 (128,581)	13年04月 (81,963)	63.7%	22ヵ月間	23ヵ月間
⑧中国減速	15年03月 (147,380)	16年10月 (93,884)	63.7%	20ヵ月間	17ヵ月間
⑨米中貿易摩擦	18年03月 (182,860)	20年05月 (51,239)	28.0%	26ヵ月間	22ヵ月間
⑩ウクライナ侵攻	22年03月 (166,263)				

## 工作機械受注高と前年同月比の推移（2000年1月～25年10月）



出所：日本工作機械工業会

## 工作機械、工作機器、機械工具、産業用ロボットの生産額の推移



出所：経済産業省機械統計、日本工作機器工業会